記紀載録神話に於ける生と死の起源説明神話

福島秋穂

今日私たちが「神話」と呼び慣わしている口承文芸の一形態は、科学的思考力を持たぬ所謂未開人が、其の日常生活に於ける諸経験、或は彼らを囲繞する自然の可視的変化の因果関係を説明するため創作したものである。従って、神話は、其の創作者たちの生活の現実体験に発想の端緒を置くものであって、決して私たちの今日謂う虚構作品と同一のものではない。唯、未開人は、自分たちの思考力の限界を超える事実・現象に直面した場合に限り、彼らなりに其れを合理的に説明するため、超自然的存在態の助力を借りたのである。

其処に超自然的存在態の登場があるとは言え、神話は未開人の生活経験を反映させたものであり、未開人が其の智力を充分に働らかせた結果である故、其れは言わば、哲学・科学・文学等諸学問の萌芽であったと言うことが出来よう。そして此のような、未開人の哲学的或は科学的思考産物の一として挙げられるものに、人間の生及び死の起源を説明せんとする神話がある。

本論では、此の生及び死の起源説明神話について考察を試み、我国に於ける其れらの発生原初形態が如何なるものであったか、文献記載時に其れらがどのように改竄されたかといったことを考えてみることにしたい。

＊

まず始めに、人間の生の起源説明神話を取り上げ、考察の俎上に載せてみよう。

自分たちの祖先が、何時・如何にして現在の如き体軀を備え、此の世に出現したのかということは、未開人が、或る程度の思考力を有するようになって以来、思索し解明を試み続けた問題の一であり、其の解答として、彼らは所謂生の起源説明神話を考案したのである。ところが、同じ目的のために創られた神話であっても、人心の赴く処は必ずしも一様でなかったため、其の内容は種々様々である。即ち、或る伝承に従えば、人間は神の創作品であり、他は其れが大地より自然発生したと言い、或はまた卵より誕生したと言う具合である。しかし、人間の存在は、神話発生の不可欠条件であり、少なくとも其れを創作し得るに足る知能を有する人々の間で、自分たちの祖先の誕生が如何に行われたかが問題になることは、極めて自然の成り行きであった。ために、神話を

保有伝承する民族で、其の最初の祖先の出現に想いを馳せ、其の解答を見出し得なかったものは、ほとんど無いと言える。

今、生の起源説明神話の凡その形態・内容を知るため、世界各地に伝承されたものを、二三例として挙げてみることにする。

生の起源説明神話の代表的なものとして、私たちの脳裡に先ず浮かぶのは、『旧約聖書』創世記に採録されている所謂ヤハウェ資料創造記に述べられた、

その日ヤハウェ神は地の塵から人を造り、彼の鼻に生命の息を吹きこまれた。そこで人は生きた者となった。[註1]

という、超自然的存在態による人類創造譚である。

神話の宝庫と言われるギリシァからは、種々の生の起源説明神話が報告されているが、其の或るものは、プロメーテウスとアテーナー（或はゼウス）が、粘土と水を素材に、共同作業で最初の人間を創造したと言い、[註2]また、アフリカのドゴン族は、太初神アンマが粘土から人間を創ったと伝えている。[註3]

此のように、最初の人間が超自然的存在態により、泥土を用いて創造されたとする神話は、他にも、アリゾナ在住インディアン・モキ族、アフリカ大陸白ナイル河畔在住チルーク族、バビロニア、エジプト、オーストラリア東南部原住民、ニュー・ジーランド在住マオリ族、タヒチ島、ビルマ、エリス諸島、バンクス諸島、ニュー・ヘブリデス諸島、セレベス北部ミナハッサ族、ボルネオ、スマトラ南西ニアス島、フィリッピン諸島、東インド、エスキモー等々に伝承されており、泥土が人間に変ずる過程に、超自然的存在態を介在させない神話、ち、大地より人間が自然発生したとする神話までも含めて考えると、人間は泥土の変じたものであるとする神話は非常に多く、世界のほとんど凡ゆる地域に分布している。

最初の人間が泥土より、自発的に、或は神の創造活動によって、誕生したとする神話同様、世界各地に数多く伝承されている生の起源説明神話の他の形態は、人間の祖先が、神の助けを借りず、動植物或は無生物の自然変化により、此の世に姿を現わしたとするものである。例えば、ニュー・ブリテン島在住のバニング族からは、

原初、世界に存在するものは、太陽と月だけであったが、彼らが結婚し、石と鳥が生まれた。其の後、石が男になり、鳥が女になり、彼らからバニング族が生まれた。[註4]

という伝承が採集されており、ソロモン諸島でも、人間の祖先は砂糖黍から生じたと伝えている。[註5]

此の種の神話を伝承しているのは、カリフォルニア在住インディアン、イロクオイ族、ペルー・インディアン、ボルネオ・カヤン族、台湾紗績族トロック蕃、西オーストラリア原住民ディエリ族、東アフリカ・ワニカ族、ボルネオ・ダヤク族、スマトラ原住民、セレベス原住民、マラッカ及びニュー・ギニア原住民等々であり、多くの場合、彼らは、或る存在態と、自分たちとが特別の親縁関係にあると考える所謂トーテム信仰を有しているようである。

叙上の如く、人間の生の起源を説明する神話は、物語の内容・構成の点からみて、人間誕生の根本素材が、泥土であるか、或は

其れ以外の物質であるかにより、大きく二種に分類される訳である――男女二神が結婚し、其の結果、此の世に人間祖先が出現したと説く神話は、ほとんどないと言っても良い程、報告されていない――が、其の両者共に枚挙に暇無いほど採集記録されていることから、生の起源説明神話が、世界各地の未開人により創作され、後世に伝承されていたことは明らかである。人間が存在し、しかも其の人間が或る程度の思考力を備えていれば、自らの祖先が如何にして此の世に出現したかに想いを巡らすことは、極めて自然なことだったのである。

＊

私たちが、広く世界の諸民族に眼を向ける時、彼らの間から生の起源説明神話が数多く報告されていること、我国の近隣諸国も其の例に漏れず、此の種の神話を伝承保存していること、我国は地理的に観て、東洋或は南方世界の文化が伝播・流入する機会の多い吹き溜り的位置にあること、古来、中国・朝鮮との交渉が頻繁に行われ、我国の神話に此の両国から渡来したと思われるモチーフを有するものが、かなり多く見られること、日本民族の形成ということにまで遡ると、日本列島へ南北両世界から民族の移動が行われたと思われる節のあること等々の諸事情を考慮すると、我国にも当然此の種の神話が存在していて然るべきであると思われるのである。

今、我国近隣諸国間に伝承されていた生の起源説明神話を眺めると、凡そ次の如くである。まず台湾では、

昔眉原（メバラ）ノ後ナルヤフメーベヤント云フ所ニ巨石アリ「チャーコン」一名「ターウェ」ト称スル鳥其石ヲ動カサント焦心セシガ動カズ偶々「シーレー」鳥来リテ容易ニ其石ヲ動カシ水中ニ転ガシテ洗ヘリ然ルニ其石割レテ中ヨリ二人ノ男女出デタリ[註6]

と、最初の人類を石より生じたとするもの（大么族馬利古湾蕃・加拉歹蕃・汶水蕃、武崙族達啓覃加蕃、卑南族卑南社、沙績族内太魯閣蕃等々）が非常に多く、此の他に、動植物から最初の人間が生じたとするものが、若干記録報告されている（沙績族霧社蕃・太魯閣蕃、武崙族郡蕃、大么族萬大蕃等々）。

次に、沖縄の国生み神話では、アマミキヨ・シネリキヨの二神が、日神の詔勅に従い人間を創ったと言い、其の異伝では、アマミク神が天帝より人の種子を貰い受け、人間を創ったとされている。また、沖永良部島でも此れとほぼ同様の内容を持つ神話が伝承されている。

一方、大陸には種々の伝承があり、陰陽二神が清明の気から人類を誕生させたとも言い、盤古神の寄生虫が変じて人間になったとも、更には黄帝・桑林の共同作業により、或は女媧が黄土を材料に、人類を創造したのだとも伝えている。[註7] 更に、中国在住の所謂少数民族から報告されている伝承まで参考にすると、ロロ族は、超自然的存在態により最初の男女が泥土を用いて創られたと伝え、[註8] ラフ族は、天神が其の躰の垢で人間を創造したと言い、[註9] 苗族は、台湾に多く見られる伝承と同様、原初の人間が岩石より誕生したと伝えている。[註10]

更にまた、我々と日本列島に同居するアイヌ人は、人間の祖先

の誕生を、

神世界を創造し給ひし後種々の草木地上に生出するに到しが其全く生出せし後人間を造り給ひたり人間を造り給ふには柳木を伐り以て之を脊骨とし土を其間に塡充し給へり故に人年老ぬれば古木の如く曲りて鹿の如く屈みて歩むなり[註11]

と伝えている。

此のように極めて僅かな数ではあるが、我国近隣諸国、及び過去に於いて日本民族と直接或は間接的に少なからぬ関係を有したと思われる所謂少数民族間に伝承された種々の生の起源説明神話を見る時、私たちの誰しもが、其れらと同様のものが、我国文献記載神話中にも載録されていて然るべきであると考えるであろう。ところが実際には、此の種の神話が、我国の文献記載神話の中には全く見られないのである。

文献記載神話に生の起源説明神話が載録されていないことは、我国に其の始めより此の種の神話が全然存在しなかったことを意味するのであろうか。いや、そうではあるまい。前掲した諸事情、及び近隣諸国に其れが伝承されていること、口承文芸は一地域にとどまらず、他地域に伝播する性質のものであること、或は人間には誰も同じようなことを考える傾向のあることなどから推して、我国の民間にも古く、此れに類する神話が存在していたことは疑う余地がないのである。

＊

我国の文献記載神話に、未開人にとって極めて重大な意味を有するものであったと思われる生の起源説明神話が、何故欠如しているのかという問に対しては、幾つかの解答が考えられるものの、答を其の孰れか一に絞ることは非常に難しいことである。

まず、生の起源説明神話欠如の理由として考えられることは、民間に流布する神話伝説等の所謂口承文芸を採集記録した者、或は記紀の編纂者が、口承文芸の伝播性または人心の同似作用故に、近隣諸地域に於けると同様、古代の我国にも存在していた其れを、其の作業時に全く無視して、採り上げなかったということである。此の場合、更に細かく考えると、其の不採用の原因には、記紀神話の大綱を成す所謂天皇氏族の伝承する神話伝説群に、此の種の神話が見られなかったため、或は、天皇氏族は其れを伝承していたのだが、其れが極めて不完全且つ無価値なものと見做され、時間の経過と共に物語の展開がなされる様、既存の諸伝承を選択結合して作成された、所謂系譜型神話に、其れを挿入する余地が認められなかった故、更にはまた、此の種の神話を伝承保存していた氏族が、記紀作成時に、自らの有する神話伝説群を、天皇及び其の周辺氏族群の其れと合流させるだけの政治力・武力を持たない程弱小であった、等々のことが考えられるのだが、恐らく其の欠如の原因理由は、此のような点にあるのではないだろう。

我国の文献記載神話に、生の起源説明神話が欠けている理由を強いて求めるとすれば、私は、記紀編纂者が、政治的意図に基く系譜型神話作成という使命を重視するあまり、発生原初的形態をとどめた神話の中でも、特に哲学的色彩の濃い生の起源説明神話を、意識的に削除、或は物語の合理的展開を図る必要上、其の構成要素の一部を改竄または脱落せしめた故であるとしない限り、

原初存在した此の種の神話が、我国の神話伝説記載文献完成時までの長い年月の経過と共に、未開より半未開状態にまで進化した人々の間で、次第に忘れられていったとか、文献に記載された後、其の文献が散佚してしまったことに原因するのだとしたい。記紀編纂者が、其の編纂時に存在した生の起源説明神話を、全く捨てて顧なかったり、其の前後に他の物語を結合し、系譜型神話を作成するため、其の一部の構成要素を削除したということも考えられないことではないが、生の起源説明神話自体、記紀編纂の目的と何ら抵触する点の認められないこと、類話資料を併記する『日本書紀』にも、其れが全然見られないことなどを考慮すると、やはり其れは、記紀或は其の両書成立の直接資料となった各種文献成立時に、既に完全な形で存在していなかったのかも知れない。或は、其れが一度は文献に記載されたものの、其の文献が系譜型神話作成時までに既に散佚していたとも考えられる。

それでは、物語の合理的展開を意図した系譜型神話作成者が、最初の人間出現という一大事に全く触れることがなかっただろうか。いや、彼らは、其の出現を記紀神話中に記載しているのである。唯、其れは記紀編纂者が生の起源説明神話であると考えたものであって、我国本来の其れではないし、また、一読して直ちに其れとわかるものでもない。

＊

記紀の場合、イザナキ・イザナミ二神の黄泉平坂に於ける論争中に、青人草（国民）の語が見られ、此の段階では既に人間の存在が認められている。

個々の神話が如何に不可思議な内容を持つものであり、超自然的存在態が主人公であるからと言って、七世紀或は八世紀に、各氏族または各地の民間人の保有する伝承を整理統合し、首尾一貫した物語に構成するに功績あった我国の神話編纂者が、イザナキ・イザナミ二神の対立後に、最初の人間の登場を設定したなどということは到底考えられないことである。従って、此の二神対立以後の物語展開は、人間祖先の誕生とは全く無縁であり、重要な鍵を有するのは、其れ以前の物語ということになる。そこで二神対立以前の記事を見るに、イザナキ・イザナミ二神の結婚、イザナキ神による火神の殺害と諸神の誕生、黄泉国に於けるイザナミ神の身体腐敗に繋がる雷神の化生、此の三者が、其の内容から見て、人間の生の起源を結びつけられ得る部分である。記紀編纂者たちは、叙上の孰れかを記述する際、其の神話をもって、生の起源を説明し得たと考えたのであろう。

個々に散在する神話伝説群を結合しつつも、物語展開の順序次第は合理的ならしめんとした編纂者たちの意図を考慮すれば、叙上三者のうち第三の話は、物語展開の場自体が既に、死者の行くべき黄泉国となっていること、イザナキ神の発言に、「於二葦原中国一所レ有宇都志伎青人草・・・」と、青人草は明界に存在するものとされていることにより、其れが生の起源説明神話であると見做されたとすることは出来ない。

次に、イザナキ神による火神の殺害と、其の屍体より諸神が化生したとする話は、中国の所謂盤古説話と非常に似通った構成要素を有するものであり、物語展開の場や、イザナキ・イザナミ二

神の論争に先んじて其れが起っていること等の点で、生の起源を説くに格好の個所であったと思われるが、此処には、人間祖先の誕生との関係を思わせる節は何もない。

結局のところ私たちは、叙上二個所が、生の起源説明神話と全く無関係であるということになれば、其の叙述個所を、世界各地の伝承にはほとんど例を見ないことではあるが、イザナキ・イザナミ二神の婚姻譚に求めねばならないことになる。

※

記紀載録神話に見られるイザナキ・イザナミ二神の物語のうち、其の前半部であるヒルコの誕生までは、世界各地に分布する所謂洪水伝説の一であると思われる点を幾つか有している。

抑々、土地の高低、海河の有無に関らず、ほとんど全世界に存在する洪水伝説を見るに、其の構成は、ほぼ次の五点に要約することが出来る。即ち、

1　太初大洪水が起り、其の時、既に人類は此の世に存在していた。

2　洪水は、A人類の堕落　B偶然　C全く自然に　D不明の孰れかを原因として起る。

3　極めて少数の男女――時に一組の男女であり、或は其の孰れか一方――が生き残る。

4　此の人たちは、A浮遊物に乗り　B高山に逃れ　C大木に登り　洪水を避けた。

5　生存者が其れ以後の人類の祖となる。

の五つである。

洪水伝説の発生原因と、其の世界中に渡る分布の理由は不明であるが、私たちは、我国のイザナキ・イザナミ二神の物語を読む時、其の前半部が、叙上の構成要素を備えた洪水伝説と、非常に良く似ていることに気付く。

原初的海洋（水）、浮橋（浮遊物）の存在、二神（生存者）の結婚、ヒルコ（長子）誕生等々の、洪水伝説との類似構成、及び、

昔、鳩間島に大津波がおそい、人々は皆、津波にさらわれてしまったが、兄妹だけが、島の一番高い所にやっとのがれた。名前はわからないが、神様も一緒にのがれていた。やがて、津波がひくと、神様は兄妹をつれて里の方に降りかかった。神様の後に妹が続き、最後に兄がついてきた。途中の坂道で妹が石につまづき倒れた。すると兄も妹につまづいて妹の上に打ち倒れ、二人は結ばれた。[註12] 妹は兄の子を生み、それ以後、子孫の繁栄をみた。

という八重山群島鳩間島の話、或は、

古昔大洪水（マルヌルン）アリテ生物殆ト其種ヲ絶タントセシコトアリキ玆ニ幸福ナル二人ノ兄妹アリ曰（パポクポクポカン）ニ乗リテタテブラサン[註13]ト云フ高山ニ遁レ居ルコト久シクシテ一子ヲ挙ケタリ

という台湾原住民の伝承、更にはまた、八丈島の、

この島が覆没し、人畜が溺死したとき、ただ一人円娜婆とよぶ姙婦が櫨の木を抱いて助かり、死をまぬがれた。やがて男の子が生れ、円娜婆はその子と交って子孫をうみ、しだいに

繁殖して今日にいたった。[註14]

と伝える話など、日本本土に近接する地域に、所謂洪水伝説と見られるものの存在することから、我国の其れも、前半部を失ってはいるが、やはり其の一と見做してよいように思われる。[註15]

私の考えるように、其れが洪水伝説の一であり、発生原初時には、世界各地に分布する洪水伝説群に見られる如く、首尾一貫した物語構成を有したもので、しかも、其れのみで一個の独立神話として存在していたものを、系譜型神話編纂者が、記紀或は其の前段階に存在した文献に記載された神話に編入したものであるとすれば、彼ら編纂者には、人間の生の起源が、ヒルコの誕生をもって語られたのだとする意識があったものと思われる。即ち、系譜型神話編纂者は、人間祖先の誕生を、神々の婚姻の結果として表現したのである。

しかし、私たちが、イザナキ・イザナミ二神の登場からヒルコの誕生までを、其の前半部を欠いた洪水伝説であると見做す限り、前述した其の構成要素より明らかなように、洪水発生以前に、人類の存在を認めなければならないので、此の一連の神話記述以前に、人間の生の起源説明神話の存在を求めねばならなくなる。けれども、記紀の神話は此れ以前に、中国式宇宙開闢神話を加上しているだけで、人間の祖先が如何にして此の世に出現したかについては、一言半句も触れていないのである。従って私たちは、我国に曾て存在した生の起源説明神話が、如何なる内容のものであったか、全然別の方面から推察しなければならない。

此処で、其の手掛りとなるものは、前述した如く、文献記載神話に於いて、人間を「青人草」と称していることと、近隣諸国で伝承されている生の起源説明神話である。就中、我国古代に於ける人類の称呼は、其の起源説明神話の形態を推知するための重要な手掛りであると言える。

＊

文献記載神話が、人間を称して青人草と記していることから、私たちは、古代我国に於いて、人が草（植物）と同一視されたり、或は人と植物が密接な関係にあると考えられたりしていたことを窺い知るのである。それでは何故、人が植物と同一視されていたかということになると、前述した如く、世界各地に伝承された人類の生の起源説明神話に、人間が植物より変じたものとされる話が幾つかあったことから考え、古く我国でも、

古昔ハリギヤカポッポト云フ所ニ巨樹アリテ欝々蒼々タル枝葉ハ天地ヲ蔽ヒ日光為メニ遮ギラレテ昼尚ホ暗ク常闇ノ世ナリキ或時樹幹ノ下部ヨリ蠢々トシテ生レ出デタル者アリ四脚ニシテ身体ニハ毛皮ヲ纏ヘリ次ギニ同ジク下部ヨリ生レタルモノアリ頂上ニ一ノ瘤アレドモ其形宛モ樹木ノ如ク幹アリテ二本ノ根ト二本ノ枝トヲ具フ次ギニ上部ヨリ生レタルモノ二ツアリ一ハ其形長クシテ細ク歩行スルコトナク常ニ匍匐ス他ハ地上ヲ匍匐スルコトモナク空中ヲ飛翔ス後世此等ヲ獣類、人類、蛇類、鳥類ト称ス[註16]

という台湾の伝承に見られる如く、植物が人間に変るという話、或は植物中より人間が誕するという話、或はまた、人間が植物の如く土中より生じたとする話が存在したのではないかと考えられ

るのである。宣長や守部は、「青人草」の語を、草が盛んに生い茂るのに譬えたものであるとしたが、[註17] 恐らく其れは、此のような意味で造語されたものではあるまい。確かに青人草の語を、其れが用いられた神話の内容、即ち、千人の死に対する千五百人の誕生という物語と直結する表現であると考えれば、其れは宣長や守部の考えた意味の通りのものであるが、私は其れが語源をもっと古いところに有するもので、人間祖先の誕生に関りある言葉ではなかったかと考える。記に「子之一木」と、子供を数えるのに「木」を用いていること、後世伝説の主人公が多く植物より誕生していることなども、或はこのようなことに繋がっているのかも知れない。

＊

大地から植物の如く生じた（或は植物より変じた）最初の人間が地上に繁殖したが、或る時、何らかの原因で此の世界に大洪水が起り、二人の男女を除き、凡ての人々が溺れ死んでしまった。二人は水底の泥土で陸地を再創造し、結婚、最初不具児即ちヒルコを産むが、後に神の教えに従い正常な子供たちを得る。此のような話の前半部が何故か脱落し、主人公が神格化されて、其れが系譜型神話に採り入れられると共に、前部に中国式宇宙開闢神話を冠せられて、後部に国土・神々の産出譚――記紀編纂者は、此の部分を記述することで、生の起源説明神話を採録したものと錯覚したのである――が接続された結果、今日私たちの眼にする如き物語になったのであろう。

＊

以上極めて簡単に、我国文献記載神話に於ける生の起源説明神話についての考察を試みたのであるが、次に生の起源説明神話と並ぶ死の起源説明神話について考えてみることにしよう。

人間が何故死ぬのかという問題は、前述の生の起源同様、未開人が多少なりとも思考力を有するようになって以来、絶えず脳裡に付き纏っていた問題であり、其れに対する解答は、此れもまた世界のほとんど凡ゆる土地に於いて数多く考え出され、今日に至るまで伝承保存されているのである。

例えば、南米北東部ギアナのアラワク族は、

昔、造物主は、自分の創造物である人間がどうしているか見るため、地上に降って来ました。しかし、人間たちは邪悪だったので、神を殺そうとしたのです。そこで神は、人間たちから永遠の生命を剝奪し、蛇や蜥蜴・兜虫の如く、皮を脱いで鮮える動物たちに与えました。[註18]

と伝え、ニュー・ジーランドでは、

マウイは、人間が永久に死なぬことを望み、ヒナ（月）に、「死を短かくしてくれ。人が死んでも甦えらせ、永遠に生きさせてくれ」と言いました。するとヒナは、「仮令人間たちが溜息をつき悲しんでも、死を非常に長くしてやろう」と答えました。マウイは、「人間を、お前さんのように死んでも甦えらせてくれ」と再度言いましたが、ヒナは、「人間を死なせ、土にし、決して甦えらせまい」と言い、そのようになりました。[註19]

と、死の起源を説明している。日本本土に近い処では、宮古島か

ら、

使者アカリヤザガマは天上界から変若水と死水の桶をさげて地上に降りたが、一寸した隙に蛇が変若水を浴びてしまったので、人間には死水をひっかけた。アカリヤザガマは罰を受け、人間は死ぬようになった。[注20]

という話が採集されている。紙幅の関係上類話の提示は此の程度にとどめるが、此の種の神話伝説の類は、現在枚挙に暇無いほど、世界各地から報告され、先学により、二人の使者型・月の満ち欠け型・蛇の抜け殻型・バナナ型・或は、曲解伝令物語・脱皮物語・曲解伝令物語と脱皮物語の混合、などと分類されている。

死の起源を説明する神話は、生の起源説明神話同様、我国にも古くから存在していたものと考えられるのであるが、文献記載神話の何処を捜しても、此れが死の起源説明神話であると、直ちに指摘出来る話は見当らない。しかし、前述した生の起源説明神話のような例もあるし、宮古島をはじめ周辺諸地域の伝承が知られていることなどから、文献記載神話に其れが見当らないということだけで、我国の死の起源説明神話の原初形態は不明であるとする訳にはいかない。そこで、文献記載神話を仔細に眺め渡すと、どうやら其れらしいと思われるものが二つある。

＊

我国文献記載神話のうち、死の起源説明神話らしく思われるものの第一は、イザナキ・イザナミ二神の黄泉平坂に於ける論争、即ち、「吾當レ縊二殺汝所レ治國民日將千頭一」という妻神の発言に、夫神が「言レ如レ此者、吾則當レ産二日將千五百頭一」（紀第六ノ一書）と答える部分であり、其の第二は、ニニギノ命とイワナガ姫・コノハナノサクヤ姫姉妹をめぐる物語で、イワナガ姫が「假使天孫不レ斥レ妾而御者、生兒、永レ壽有二如磐石一之常存。今既不レ然、唯弟獨見御。故其生兒、必如二木花一之移落」（紀第二ノ一書）と発言する個処である。

此のうち前者について、松村武雄博士は、其の中核的意義が、言い争いそのものにあるのだとされたが、[注21] 普通其れは、「人口の自然増加を解釈した成因説話であるが、所論は古代日本人の有つてゐた生々繁殖主義（Fertilism）の反映である」[注22] とか、「これ即ち人類増殖の原理を説明した、説明神話である」[注23] というように、人口増加現象説明神話であると解されている。

確かに、イザナキ・イザナミ二神の黄泉国に於ける物語が、其の発生原初段階より、火神の誕生・イザナミ神の死・イザナキ神の妻神訪問と、密接な関係を有し、首尾一貫した物語の展開を構成するものであったとするならば、此の二神の論争を、人間界に於ける死の起源であるとすることは、論争以前にイザナミ神の死が既に語られている故に、合理的解釈でなくなり、単に人口増加現象説明神話と解した方が良いことになる。

しかし、此の二神の論争部分のみが、他と無関係に独立発生したものであったとすれば——我国文献記載神話成立の際の諸事情を考慮すると、此の方が、前記の如く首尾一貫した前後関係を有する神話より、一層発生原初的形態に近いように思われる——其れは、明らかに二神の対立により、人間の死の起源を説明しようと試みた未開人の創作になる神話であることになる。

二神の対立により、人間界に死が始まったとする話は、

神々が人間の命について議論した。善神は鰻の皮をはぐように人間を若返らせることを主張したが、悪神が死を主張したため人間は死ぬようになった。[註24]

という、メラネシアのアムブリム島原住民の伝承、或はフイジー族の、

昔、月が、人間は自分のようにあるべきだと主張しました。即ち、月は自分が年老い、消えるが、再び姿を現わすように、年老いた人間も暫らく姿を消して後、甦えるべきだと言ったのです。しかし、フイジー人の神であるネズミが、其れを聞こうとせず、「人間はネズミのように死なせろ」と言いました。議論で、彼が勝ったので、今日人間はネズミの如く死ぬのです。[註25]

という話等によって代表され、此れらと同じ型の話は、南北アメリカ大陸原住民、ペリリュー島及びバンクス諸島原住民、グリーンランド・エスキモー、アフリカ大陸原住民――アフリカの場合、所謂伝令モチーフとの結びつきが見られるので、他の地域の其れと同列にして論ずるためには、今暫らくの考察が必要であると思われる――南東オーストラリア及びニュー・ジーランド原住民、サモア人、マレー半島原住民等々の間に広く分布している。

我国のイザナキ・イザナミ二神の論争も恐らくは、此のように二神の対立の結果として、人間界に死が始まったのだとする神話群に属するものであったのだろう。

今、此の種の神話の分布状態から、大胆な推測を試みるならば、二神の対立により人間の死の起源を説明しようとする物語構成要素が、東南アジア近辺で最初に発生し、其れが南方世界に伝播する一方、大陸を北上し、北アジアから更にアメリカ大陸へと伝わって行く道程で、日本列島にも伝播し、其れに種々の物語要素が付加され、また系譜型神話に編入されるうち、其の本来の意義が見失われ、今日私たちの眼にする如き、人口増加現象説明神話の観を呈するに至ったのではないだろうか。

＊

次に、イワナガ姫とコノハナノサクヤ姫に関する物語について考えてみよう。

此の物語は、記紀の物語展開の順序に従う限り、前述の黄泉国に於ける論争同様、死の起源説明神話とは見えず、単に神の子＝天皇の命が、永遠でないことの説明譚であるとしか思われない。しかし、恐らく此れも、既に松村武雄博士などにより指摘された如く、其の発生原初的形態に於いては、ニニギノ命といった神的存在態や天皇、或は記紀に記載された其の前後の物語などとは全く無縁のもので、主人公は単なる人間であり、一個の遊離伝承だっただろう。

人間が永遠なる物を退け、一時的な物を求めた結果、短命になったのだ、死すべき運命を担うに至ったのだとする話も、二神の対立による死の起源説明神話同様、世界各地から数多く報告されており、私たちが其れらを、記紀載録の其れと比較する時、其処に幾つか極めて良く似た物語構成要素の存在することに驚かされる。今、参考のため、此の種の神話を二三挙げてみると、まず、

セレベス中央部ポソの原住民は、

最初の祖先達は、創始者が綱で天から地上へよく下ろしてくれた贈り物を間違って選択してしまった。ために、遂に不死を失ってしまった。[註26]

と言い、神の贈り物である石とバナナのうち、人間は後者を取ったと伝えている。また、ニアス島原住民は、

大地が創造された時、創造の最後の仕上げとして、天から神により一人の人間が送られてきました。彼は一月の間絶食すべきだったのですが、飢えに耐えることが出来ず、バナナを食べたのです。食った物がいけませんでした。というのは、彼がバナナのかわりに蟹を食べていれば、人間は蟹のように皮を脱いで、死ぬことにはならなかったのです。[註27]

と言い、ギリヤーク族は、

神は人間の食物は木の実であって草を食べると死ぬと教えた。この神は人間に対して好意をもっていたのだったが、他に悪い神がいた。この悪神は、「人間は木の実を食べると宜しくない、草を食べよ」と教えた。人間は皆この悪神の言う事を信じ、草を食べる様になった。それで人生はこの様に短いものとなったのである。[註28]

と言う。

叙上の神話群は、其処に登場するバナナや草を花に置き換え、蟹・木の実を石に換え、然る後に夫れ夫れを神格化すると、我国のコノハナノサクヤ姫・イワナガ姫に関する神話と、全く同じ発想・内容をもつ神話となる。此のような著しい類似より推して、私たちは、此処で考察の対象にしている我国の神話が、本来、中国、安南、台湾、ニュー・ギニア、ニュー・ブリテン島、バンクス諸島、ニュー・ヘブリデス島、サモア島、南米ギアナ、ニアス島、北ローデシア等々に於いて伝承されていた、永久的存在と暫定的存在との対立により死の起源を説明せんとする話と、全く同じ範疇に属したものであることを知るのである。

原初、人間が、永久的存在物を拒絶し、暫定的存在物を採った結果、死すべき者となったのであるとする話が、既に考察を試みたイザナキ・イザナミ二神を主人公とする死の起源説明神話とは全く別個に独立して、日本列島内で発生或は他地域から伝播し、民間で伝承されている間に、何時しか永久的存在態が醜女として、其れに対する物が美女として表現されるに至り、更に其の話が、現人神たる天皇の命の、普通の人間同様短いことを合理化する目的で、系譜型神話の構成要素として、作為的に所謂神代から人代に移り変る直前に、採録されるに至って、本来二個の存在態を選択し、死すべき運命を担う結果になったと説かれていた人間は、未だ神的存在態の範疇に属するニニギノ命に変えられ、其れに伴って、石を象徴する醜女と花の人格化である美女も神的存在態に昇格し、両者の父に、石・花の存在が多く見られる山が当てられ、其れが神的存在態として登場するようになったもの、其れが、私たちの現在眼にする記紀所載の神話であると考えられる。即ち、発生原初段階に於いて、死の起源を説く単純素朴な民間伝承に過ぎなかった話が、文献に記載される時点で、政治的潤色を施されるに至り、其の本来の意義を歪められてしまっているので

ある。此のことは、紀の第二ノ一書に、「一云、磐長姫恥恨、而唾泣之曰、顕見蒼生者、如二木花一之俄遷轉當二衰去一矣。此世人短折之縁也」とあり、ある時期まで民間では此の神話が、天皇ならぬ人間の短命であることの説き明かしであると考えられていたらしいことによっても、容易に窺い知ることが出来る。

※

以上の極めて簡単な考察から、我国の文献記載神話、就中記紀の系譜型神話には、生及び死の起源説明神話という、未開人にとっては極めて重大な意義を有したと思われるものが、全く欠如しているかの如き観があるが、其れは、神話編纂者の意識的或は無意識的改竄、亦は神話に対する認識不足の結果であり、古くは其れらが、世界の他の地域同様我国にも存在したことに、私たちは気付くのである。

古来我国に於いて伝承された各種の神話伝説群を、採集編纂することにより完成した所謂系譜型神話は、天皇及び其れを囲繞する氏族達の、為政者たる立場・権利の正当性主張を作成の至上目的としたため、民族遺産の一とも言える生の起源説明神話を、其の発生原初的形態にまで復元して採録することをせず、逆に、死の起源説明神話の場合、発生の根源・伝承者を異にすると思われる二個の伝承を、記は、秩序整然たる神話作成という目的に反し、取捨選択の労をとることなく共に採録、紀は、「一書曰」という一伝承の形で記載したに止まったのである。

生の起源説明神話の場合、其の発生原初的形態が、何故か記紀或は其の直接の資料となった各種文献成立時には、人々から忘れられており、系譜型神話編纂者は、イザナキ・イザナミ二神による神々及び国土の産出譚、就中、ヒルコの誕生を語ることで、人間の発生を語り得たと、錯覚したようである。また、死の起源説明神話の場合、其の責任が、神話採集者或は記紀編纂者の孰れにあるか判然としないが、創作の目的を同じくする二個の神話が、孰れも原初的形態のまま採録されず、一方は人口増加現象、他は天皇の命に限界のあることを説明するものとして、内容を歪めて採録されているのである。

私たちは、生及び死の起源説明神話の採録の仕方から、我国の文献記載神話、就中、記紀所載の其れが、一見何の矛盾も見せず理路整然と展開されていながらも、其の実、極めて杜撰な作品であることを知ると同時に、其の成立過程に、種々の紆余曲折、即ち、神話伝説群の変改結合・取捨選択・整理統一、或は政治的圧力の介入等々のあったことを窺い知るのである。

註

1 関根正雄訳『旧約聖書創世記』—岩波文庫—九—一〇頁。

2 呉茂一著『ギリシア神話』(上)四七頁。

3 デシャン著・山口昌男訳『黒いアフリカの宗教』四九頁。

4・5 R. B. Dixon, Oceanic Mythology, pp. 110–111.

6 臨時台湾旧慣調査会第一部『蕃族調査報告書』—大么族南澳蕃—二七頁。

7 衰珂著・伊藤敬一他訳『中国古代神話』(上)五七頁。

8 P、ヴァイル著・鳥居竜蔵訳「猓玀の神話」—『日本周囲民族の原始宗教』二五九—二六一頁。

9 中国現代文学選集『少数民族文学篇』一八九頁。

10 鳥居竜蔵著『有史以前の日本』三一八頁。
11 ジェー・バチェラ著『アイヌ人及其説話』上巻八四頁。
12 村武慶著「琉球八重山の宇宙開闢説話」—『民族学研究』第三〇巻第三号二五七頁。
13 臨時台湾旧慣調査会第一部前掲書—阿眉族南勢蕃—二頁。
14 関敬吾著『民話』一八〇頁。
15 拙稿「やぶにらみ神話論(四)—洪水の話について」—『文芸と批評』第十号。
16 臨時台湾旧慣調査会第一部前掲書—沙績族トロック蕃—六頁。
17 本居宣長著『古事記伝』六之巻。橘守部著『稜威道別』巻四。
18 J.G. Frazer, The Belief in Immortality, vol. I, p. 70.
19 Dixon, op. cit., p. 54.
20 ニコライ・ネフスキイ著「月と不死」(二)—『民族』第三巻第四号四五—四六頁。
21 松村武雄著『日本神話の研究』第二巻四八五頁。
22 西村真次著「記紀の人類学的諸問題」—『早稲田文学』第二六三号一〇二頁。
23 次田潤著『古事記新講』六六頁。
24 松村武雄編『神話伝説大系』—「メラネシア神話伝説集」二五四頁。
25 Frazer, op. cit., pp. 66-67.
26 プロイス著・加治明訳「死の神話」—『現代のエスプリ』第二二号一三二頁。
27 Frazer, op. cit., p. 70.
28 服部健著『ギリヤーク』八一頁。

新刊紹介

松尾靖秋著　国文学紀行
—ヨーロッパにおける日本文学研究—

「欧米における日本文学研究並びに日本語教育の実情調査」という目的で、一昨年(昭和四十一年)モスクワを経てヨーロッパ各地をめぐり、アメリカを横断された筆者の、その折の成果の一端が「紀行」のかたちをとったもの。滞在地の印象記と、諸大学の調査結果が、道順に従ってアレンジされている。印象記の部分からは、筆者と一面識のない読者も、筆者の繊細にして磊落、かつ篤実な人間像を筆者の行動を通じて思いうかべる事が出来る。忌憚のない筆者の言葉は、又、印象記をそのまま文明批評にまで高めている。就中、モスコー、ベルリンでの印象談は、本紀行中の白眉。俳文学者である筆者が、俳味豊かに綴っていかれる文章は読者を魅す。諸大学の調査結果を記した部分で、調査対象となっているのは、モスコー、コペンハーゲン、ハンブルク、ボン、ウイーン、パリ、ロンドン、ケンブリッジの各大学。諸大学に於ける日本文学研究の現状が簡明に報告されていて、我々日本文学研究学徒の興をひく。報告を読んでいると、第二、第三のエズラ・パウンドを期待したくなってくる。

(昭和四十三年一月　東出版　B6二〇一頁　六八〇円)　(復本一郎)